はじめに

西山雄二
（首都大学東京）

本特集はフランスでの六八年五月の出来事から50周年の節目に編まれたものである。編者は2017-2018年にパリの国立東洋言語文化大学（通称イナルコ）にて在外研究をおこなったが、この年度はちょうど六八年50周年を記念する時期だった。編者はかつて、モーリス・ブランショが五月革命に参加して主に匿名で執筆した文章群を翻訳し、解説を書いたことがあり[1]、博士論文では彼の文学－政治的な活動に即して六八年五月を掘り下げて論じた[2]。また、40周年の時期には、五月の社会的記憶の継承に関する論考を執筆したこともある[3]。かつてから抱いていた問題意識に突き動かされて、昨年、パリで六八年の50周年目を過ごした際、さまざまな催事に参加し、多くの刊行物を手に取ってみた。また、六八年の当事者にも積極的に話を聞き、後続の若い世代とも六八年について議論したりした。こうした現場での体験と情熱から同輩ないし若手の研究者らと紀要で特集を組もうと考えるに至り、その協同の成果として結実したのが本特集号である。

六八年50周年を記念してフランスのみならず、いくつもの国々と言語で雑誌特集が組まれた[4]。ただ、本号は時間をとって準備したことで、2018年に公刊されたさまざまな言説を参照し、各々の論考に盛り込んでいる。50周年を期に六八年がいか

---

[1] モーリス・ブランショ『ブランショ政治論集1958-1993』安原伸一朗・西山雄二・郷原佳以訳、月曜社、2005年。

[2] 西山雄二『異議申し立てとしての文学――モーリス・ブランショにおける孤独、友愛、共同性』、御茶の水書房、2007年。

[3] 西山雄二「フランスの68年　68年５月の残光」、『1968年の世界史』、藤原書店、2009年。

[4] 日本語雑誌での特集としては、「思想」2018年５月号（特集〈1968〉）と「情況」2018年秋号（特集＝ポスト68の思想的課題）が組まれた。

に語られたのかも含めて、これまでの議論の整理や分析がなされているわけである。

すでに2000年頃から、六八年五月の時間的・地理的な限定が問いに付され、より広い視座から一連の出来事が検討されるようになってきた[5]。そもそも1968年の出来事は５月に終結したわけではなく、６月にまで及ぶのものであった。さらには、1962年のアルジェリア戦争から1981年のミッテラン大統領の誕生までの時代区分から社会的・政治的・文化的な変容を分析し、六八年はその主要な震央にすぎないという見方もできる。また、パリのみならず、フランスの各地方や各都市から、より国際的な視座から（アメリカ、日本、キューバ、ヴェトナム、東ヨーロッパ諸国、アフリカなど）六八年を分析し直す態度も一般的となっている。そして、六八年の当事者は、学生や労働者といった異議申し立ての側、政治家や警察や機動隊といった体制側だけに限定されはしない。女性や移民、子供に至るまで、あの時代を生きたあらゆる社会階層の人々が何らかの影響を受けており、六八年の社会的記憶をこれまで形作ってきた以上、多種多様な人々が当事者や証言者となりうるのである。

このように六八年への見方は多様化しているのだが、本特集号ではフランス（とりわけパリ）の六八年五月を基調とした論考を、主にフランス語文献に依拠して用意した。ただし、これまで日本ではさほど紹介されてこなかった、あるいはほとんど言及されてこなかった論点（文学、キリスト教、移民、女性、美術、ファッション、映画）を選ぶことで、五月に対する新たな見方を日本語読者に提示するように心がけた。また、各論考の末尾には参考文献を記して、それぞれの論点に関する最新の文献情報を掲載している。

六八年五月と文学に関する論考に関しては、リヨン高等師範学校の歴史研究者ボリス・ゴビーユ（Boris Gobille）氏に翻訳掲載の承諾を得ることができた。カナダの雑誌*Études françaises*, Volume 54, Numéro 1, « Écritures de la contestation. La littérature des années 68 », Les Presse de l'Université de Montréal, 2018に掲載された論考である。ゴビーユ氏は2018年に『作家たちの六八年五月――政治危機と文学的前衛』（*Le mai 68 des écrivains : crise politique et avant-gardes littéraires*,

[5] G. Dreyfus-Armand, R. Frank, M.-F. Lévy, M. Zancarini-Fournel（dir.）, *Les années 68. Le temps de la contestation*, Éditions Complexe, 2000.

CNRS Editions, 2018）を刊行して注目を集めたが、本号に掲載された論考にはそのエッセンスが詰っている。

執筆者には編者から主題や方向性、いくつかの主要参考文献を示したが、各人はそれぞれの専門的知識を十全に発揮して、充実した論考を寄せてくれた。毎年ルーティン化している大学の紀要の存在意義は往々にして曖昧だが、このように若手・中堅の初々しい貢献によって紀要が充実し、また、彼らにとってのインセンティブになることは実に理想的である。また、大学において非常勤講師とは教育活動だけの関係になりがちだが、本号では、３人との共同によって、紀要の特集を組めたことは稀有で喜ばしい成果だった。みなさんの参加に心より感謝する次第である。